

日時：平成 25 年 12 月 19 日(木) 13:30 - 17:00

場所：下目黒住区センター（第 2 会議室）

1. 「**常温核融合**」/低エネルギー核反応の現状」：伊藤（泰）

伊藤氏より現時点の理解としてまとめられた内容について報告があった。「常温核融合」と通称されているが、低エネルギー核反応（LENR）というべきものであることが述べられ、資料に従い、§ 1 簡単な経過・前史、「常温核融合」フィーバーの時代、・現在、§ 2 実験的に確からしい事実、§ 3 実験結果の例、§ 4 理論、§ 5 群像 5-1 懐疑派、5-2 積極的な層（1）真面目に研究しようとする層・（2）ベンチャー群・（3）信奉者（あるいは野次馬）の内容が報告された。

質疑では、まだ不確かであり個人の範囲での研究は良いが、プロジェクトとして周りを巻き込んでしまうのはよくない、当初否定的に見られていても現在の地位を得ている科学・技術の例はあり、裏付けがあり再現性の得られる実験事実は受け入れることも必要ではないか、等の発言があった。報告で、フィーバーの切っ掛けになった発表の実験過程が明確にされていないことが指摘されていたが、フィーバー当時の周囲の状況を振り返ると、正確な事実を反映する実験手法・過程は大事だと再認識している。

2. 「**極限作業ロボットと福島原発事故（科学・技術・社会・国家）**」：菅沼

日本での原発関連ロボット開発の経緯等について調査・検討した結果が論じられた。日本でも TMI 事故や JCO 事故を契機に原子力事故関連のロボットプロジェクトが進められたが、実用機の開発というよりロボットの研究が主眼であった。そして安全神話のために実際の使用はないとされ、計画終了後は廃棄か放置となった。また、2000 年ころ原子力災害ロボット等の開発が行われたが、やはり維持管理体制の不備などのために事故直後には使えなかった。ようやく 2011 年 5 月ころから少しずつ国産ロボットが使われるようになり、ロボット関連学術団体も福島廃炉作業用のロボット開発を提言した。一方フランスなどではチェルノブイリ事故以降、ロボット運用チームの設置が義務化されている。今後、日本でも長期的な運用体制、操作用の車などの運転用ハードシステム、事故状況に合わせる能力などの整備を考えてゆく必要がある。

質疑では、自然災害への対応と合わせて自衛隊が災害用ロボットの維持・運用を担当するという案や海外での事情などについて議論があった。

以上